遊ぶ◎どうして遊んではいけないの？◎

【エピソード】

洋平(ようへい)さんは21歳の大学生。中学生の時の事故で脊椎(せきつい)を損傷(そんしょう)し、車椅子を使うようになりました。自宅から大阪郊外の大学まで、電車通学しています。自宅近くの駅にはエレベーターがあるので、ほかの駅のように、駅員に介助を頼む必要はありません。

4月末のある日、洋平さんはサークルの新人歓迎会に出席しました。大いに盛り上がって3次会まで行き、午前0時過ぎに自宅近くの駅に戻ってきました。改札口まで来ると、いつも使う車椅子用の出口に鍵がかかり、閉鎖されています。そうなると自動改札しかなく、幅が狭いので車椅子では通れません。あたりに駅員の姿は見あたりません。困った洋平さんは駅長室を探しました。出てきた駅員は洋平さんを見るなり、「こんな遅くにどうしたんですか」と驚いたように言いました。洋平さんが、車椅子用出口を開けてほしいというと、駅員はめんどうそうな顔をしました。ちょうどその時、別の乗客が落とし物のことで駅長室にやってきたため、洋平さんは、30分近く待たされることになりました。

ようやく時間ができた駅員は、鍵を持って車椅子用出口に向かいながら、洋平さんに次のような言葉をかけ続けました。「こんな時間まで遊んでたんですか」「親御(おやご)さんが心配してますよ」「夜遊びはやめたほうがいいですよ。危ないですから」

洋平さんは、知り合いでもない駅員からこのように言われて不愉快でしたが、言い返しませんでした。電車が駅についてから40分後に、ようやく洋平さんは自宅に向かいましたが、家に帰る道すがら、「なんで、あんなことを言われなあかんのか」と、腹が立ってきました。

対話のために

- ●このエピソードで、どんなところが気になりましたか？
- ●どうして車椅子用の出口が閉まっていたのでしょう？
- ●洋平さんの気持ち、駅員の気持ち、それぞれ想像してみましょう。

【発展編】

翌日の洋平さん

洋平さんは翌朝、思い切って駅長室へ行きました。駅長を呼んでもらい、昨夜の出来事を伝えました。「電車が動いている時間に、車椅子用の出口が閉まっているのはおかしい」、「その場に駅員がいられないなら、せめてインターホンですぐ呼び出せるようにしてほしい」と要求したのです。駅長は、おとなしそうに見える洋平さんの口からそのような言葉が出てくることに、意外さを感じている様子でした。

駅長は言いました。「しかしね、お客さん。夜、出歩いたら、危ないじゃないですか。せめて10時までに通ってもらったら、こちらも親切に対応させていただくんですがね」。洋平さんは、言い返しました。「夜が危ないとのことですが、どうして僕にだけ言うんですか。飲みに行っちゃいけないんですか」。すると駅長はびっくりして「えっ、お客さん、お酒飲むの。昨日も飲んでたの」。洋平さんは「またか」と思い、うんざりしてきました。大学生として友達と遊んだり飲んだりするのは、日常のひとこまに過ぎないのですが、こうした対応にあうこともまた、珍しくないからです。

洋平さんはつぶやきました。「ぼくはただ、電車から降りて、家に帰りたかっただけやのに」

【ミニ解説】

◎「遊ぶ」とステレオタイプ

誰でも、働いたり勉強したりばかりでは、疲れてしまいます。「遊ぶ」ことは「休む」ことと同様、人として大切で、当たり前のこと。それなのに障がいのある人は、「遊ぶ」なんて贅沢(ぜいたく)だ(他にすべきことがあるはずだ)、と見られてしまうことがあります。「自分の身の回りのこともできないのに･･･」と言われることもあります。

私たちの中には、どこかに「障がい者イコールがんばる人、純粋な人」といったイメージがないでしょうか。それはたとえば、テレビドラマに出てくる「障がい者」像や、障がい者に関する報道の仕方に影響を受けたものかもしれません。知らず知らずのうちに、ステレオタイプ的な見方を身につけてしまっていることはないでしょうか。ステレオタイプとは、「〇〇とは、△△するものだ」といった固定的な見方のことで、偏見や差別につながることがあります。

◎遊ぶのは危険？　～何がバリアになるのか～

障がい者や高齢者、さらに子どもはよく「危険だから」という漠然(ばくぜん)とした理由で遊ぶことから遠ざけられることがあります。エレベーターやスロープのついていない飲食店や映画館、カラオケ店が多いことを見ると、「遊びや楽しみ」のバリアフリー化がまだ進んでいないことがよくわかります。しかしこうした物理的バリアに加え、「もしものことがあったら」といって、主催者等が障がい者本人が希望しても遊びやスポーツへの参加を認めない場合があります。本人が自分の「障がい」についてよく知っており、自分で責任を持てる、という発想がもてないのです。実際に、「もし地震や火事があったらいけないから。危険だから」といって車椅子の利用者の入館をこばんだ映画館がありました。不慮の事故の場合は、障がいのない人だって危険にさらされるはずです。なぜ障がい者だけ「危険」なのでしょう？

◎障がいのある人の多様な楽しみ

障がいのある人は、どんな遊びをしているでしょうか。音楽を聴き、映画を観、本や漫画を読み、買い物を楽しみ、テレビゲームをし、カラオケやボーリングをし、芸術活動に打ち込み、遊園地に出かけ、コンサートやライブで熱狂し、旅行する。要するに障がいのない人と同様、さまざまです。スポーツも同じで、「障がい者スポーツ」と聞くとパラリンピックを想像する人がいるかもしれませんが、純粋に楽しむものから、ハイレベルをめざす競技スポーツまであるのも、実は、障がいのない人の場合と同じなのです。障がい者独自の生活スタイルや体の特徴にあったもの(視覚障がい者卓球、車椅子テニス等)を楽しむ人もいますし、それぞれに工夫して、特に「障がい者」と銘打たないスポーツを楽しむ人も大勢います。

●参考：障がい者スポーツの楽しみ

障がい者スポーツのほんの一例を紹介します。

（参考 HP　社団法人 大阪府理学療法士会「障害者スポーツと理学療法士」より）

■車椅子バスケットボール

巧みな車椅子さばきによるそのスピード、車椅子どうしのぶつかり合いは、迫力に満ちています。障がいのレベル等に応じてクラス分けを行うことにより対等にプレーできるよう工夫されており、一般のバスケットボールとほとんど変わらないルールで行われます。

■車椅子テニス

車椅子テニスは健常者を含めて最低 2 人で、普通のラケットとボール、テニスコートさえあれば可能な手軽さとそのゲーム性で、身体障がい者スポーツとして急激に普及しました。

■障がい者カヌー

カヌーやカヤックは、障がい者が車椅子や杖などから解放され、カヌーまたはカヤックとパドルさえあれば障がいのない人と同様に楽しむことができるスポーツです。

■障がい者ダイビング

幅広い年齢層において、レクリエーションとして人気の高いスポーツ。ダイビングでは、障がいのない人と同じルールで、障がいのあるなしの区別なく楽しめ、また障がいの内容やレベルの違う障がい者どうしでも同じ楽しみを同時に共有することができるという特長があります。

■スーツスイミング

ウェットスーツを着用して行います。元来、身体の運動機能の改善を目的に開発･実施されてきましたが、基本的な泳法を身につけることにより、スイミング自体を楽しみ、健康増進･精神的なリフレッシュなどレクリエーションスポーツとして親しんでいる人も多くあります。

■チェアスキー

日常の生活の中では行動範囲が制限されがちな障がい者にとって、雄大な雪景色の中でスキーをすることは、単なるレクリエーションにとどまらず、日頃の抑圧感から解放、自信や積極性の回復など、大きな心理的効果を持っています。ゲレンデを滑り降りるアルペンスキーでは、重力を利用して運動できることが大きな特徴です。

【キーワード】

■バリアフリー

「バリアフリー」という言葉を聞いたことのある人は多いでしょう。障がいをのある人が生活したり、社会参加する際に「バリア」（障壁）となるもの（物理的な不便さ、制度上の壁、差別意識）をなくしていこうという考え方や、実際の取組みをさしています。ここでは、「移動する」ということについてのバリアフリーを取り上げてみます。

現在は次第に改善されていっていますが、身体に障がいのある人がいったん外に出ると、「ビルの上の階にあがる」とか「駅でプラットホームに行く」「電車を乗り換える」といったことに、多大な不便を強いられます。視覚障がい者の場合、点字ブロックのないところで歩くのは非常に危険を伴うものです。さらに常に周囲の人に「感謝する」ことを強いられたり、人々にじろじろ見られたり、という苦痛を感じなければならないことが多く、それらは労働機会や生活の幅を狭めることにもなってきました。そんな中で、障がい者自身がさまざまな運動や働きかけを行ってきた結果、ようやくエレベータやスロープ、点字ブロックを設置する駅が増え、バリアフリー関連の法律もできてきました。

しかし、本当のバリアフリーが実現するためには、まだ多くの課題があります。

遊ぶからひろげていくと

1 年老いた姑を介護しているAさんは、365日休みなし。「遊ぶ」なんてここ何年もなかったのです。しかし「レスパイトサービス」という制度の存在を知り、姑を施設に預けて、数年ぶりに友人と旅行を楽しむことができました。しかしAさんの親戚は、「姑をよそに預けて遊びに行くなんて、なんという嫁だ」と、Aさんを非難しました。

2 Bさんには多動性の障がいをもつ5歳の息子がいます。たえず注意をはらわなければならないので、正直、たいへんです。もともとカラオケが好きなので、たまには友達と行きたいと思うのですが、日ごろから、「障がい児の母親は、息抜きに遊ぶなんて許されない」という空気を、ひしひしと感じ取っています。

3 小学6年生のCくんは、夏休みのほとんど毎日、塾の夏期講習に行かなければなりません。Cくんの両親は「有名中学に入るには、夏がヤマだから」と言って、勝手に申しこんでしまったのです。Cくん自身は、もっと遊びたいと思っています。

【ミニ解説】

1や2では、家庭の中でも女性が、「家族が寝たきりや障がい者なら、介護・育児(療育)に専念するのが当然の役割」という縛りを受けています。これはジェンダー（社会的性差、役割意識など）の問題でもあります。しかしこうした人たちこそ、積極的に「遊ぶ権利」を行使していいし、周囲の人はそれを支援（情報提供も含めて）する必要があるのではないでしょうか。(もちろん、「時々休養する、遊ぶ」ことで問題が解消するわけではないことには注意が必要ですが)

3は、子どもの気持ちを無視し、子どもの大切な権利を奪った例です。「息子のためを思って」と言いながら、実際には、親の願望を押しつけているのかもしれません。

＊子どもの権利条約（児童の権利に関する条約）の中の、遊びやレクリエーションの権利（第31条）。

「動詞からひろがる人権学習」(第6刷)　大阪府教育庁市町村教育室地域教育振興課　平成30年12月発行

540-8571　大阪市中央区大手前2丁目　電話06(6944)9372　http://www.pref.osaka.jp/chikikyoiku/dousikara/index.html